

第 40 回東京医科大学医学会フォーラム The 40th Medical Science Forum (MSF)

勝 村 俊 仁¹⁾ 山 本 謙 吾²⁾

Toshihito KATASUMURA, Kengo YAMAMOTO

¹⁾東京医科大学健康増進スポーツ医学講座

²⁾東京医科大学整形外科学講座

2013年11月12日(月)午後6時より、大学病院臨床講堂において、第40回東京医科大学医科学フォーラムが開催された。今回は、本学整形外科学講座の遠藤健司先生による臨床研究と澤地恭昇先生による基礎研究のご講演をいただいた。基礎から臨床まで様々な分野の参加者を集め、病態と治療についての活発な討論が行われた。

最初に、澤地先生より「運動器疼痛の病態解明に向けた基礎研究」というタイトルでご講演が行われた。近年、整形外科領域においても運動器疼痛の管理が注目され始めている。関節リウマチ(RA)や骨粗鬆症に対しては、基礎研究の成果により病態解明が進み様々な新薬が開発され治療効果、疼痛緩和ともに飛躍的な向上が報告されている。これらと比べ、我が国で主訴の多い腰痛や変形性関節症(OA)に対する新規薬剤は無く、その主体は已然NSAIDs(non-steroidal anti-inflammatory drugs)であり、COX-2(cyclooxygenase-2)活性を阻害することでPGE2(prostaglandin E2)産生を抑制し、疼痛緩和を期待するものである。その原因として、腰痛およびOAの病態が十分に解明されていないことが挙げられ、特に腰痛(特に椎間板性腰痛)発症の分子機構として、近年、炎症または加齢等による椎間板の酵素的な変性、それに引き続いておこる神経侵入といった2段階が提唱されている。前者には、細胞外基質分解酵素であるMMP(matrix metalloproteinase)、後者には神経成長因子であるNGF(nerve growth fac-

tor)が重要な役割を担うと考えられている。演者の研究グループで、これらの発現に対する選択的COX-2阻害剤の効果を検討した結果、MMPおよびNGFともに発現が増強され。選択的COX-2阻害剤は、PGE2による急性疼痛には有用であるものの、椎間板変性、神経浸潤といった腰痛の病態形成をむしろ増悪させる可能性が考えられることが発表された。さらに今後臨床応用に向けて取り組む内容も述べられ大変有意義なものであった。

次に遠藤先生より、「慢性疼痛の治療、最近の知見」というタイトルで臨床の実際についての講演があった。慢性疼痛は、通常3か月以上継続した疼痛と理解されているが、近年、急性疼痛がただ単に慢性化したものではないことが解明されている。従来のNSAIDsのみの継続治療では効果不十分な患者の病態解明がなされるようになってきている。在日米国商工会議所(ACCJ)が、2011年11月25日、全国の男女5,000人を対象に行なった「疾病の予防、早期発見および経済的負担に関する意識調査」の結果を発表。疾病による欠勤や能率低下、退職など、疾病が日本経済にもたらす損失額が年間3.3兆円であり、うつ病など精神疾患と、肩や腰などの慢性的痛みや片頭痛が二大要因であった。このうち疼痛によるものは3,700億円であると報告されている。

慢性疼痛保有者の約70%は病院・医院の受診経験を持つが、満足のいく程度に痛みが和らいだ人は22.4%と低く、半数以上の人で通院を継続すること

があきらかとなった。専門科でみると整形外科が45%で最も多く、ペインクリニック科を受診した人は0.8%で、疼痛専門医への受診率が低いことから、全国的な疼痛治療の啓発活動が必要である。疼痛治療には、急性期には抗炎症薬治療が重要であるが、慢性化した場合には、末梢神経感作、中枢神経感作などによる影響が考えられるため、抗てんかん薬、抗うつ薬、弱オピオイドなどを症例に応じて使用する必要がある。また、最近では、脊椎アライメント(姿勢)異常による難治性腰背部痛の治療には適切な運動療法や手術療法が必要となる場合もあるこ

とを実際の手術症例を提示しながら具体的に解説された。

これらの講演を通じて、運動器慢性疼痛に関する基礎的知識から臨床知見までの最新情報を得ることができ、参加者にとって大変有意義な会となった。講演会終了後には、場所を大学病院6階のカフェテリアに移し、懇親会が開催された。講演者を囲んで和やかに情報交換が行われフォーラムは無事終了となった。短い時間ではあったが、基礎と臨床の架け橋として有意義な時間となった。

(文責 山本謙吾)